

くらしの中の出雲弁



発刊にあたって

出雲弁は、わたしたちの暮らしの中で語り続けられた言葉です。しかし、社会環境の変化の中で、その素朴な語りを受けつぐ者も徐々に少なくなってきました。そのような折り、出雲弁話者が「宍道町ふるさと伝承人」に選定されたのを契機に、有志が集い、藤岡大拙、木幡修介、川島光雅各氏を顧問に宍道・出雲弁保存会が発足しました。

保存会では、出雲弁の園遊会、学習会、スピーチ大会など、多彩な催しをとおして、出雲弁のもつ独特のイントネーションを楽しむとともに、出雲弁の歴史や文化を学び、後世に記録として伝えていこうとも考えています。

「くらしの中の出雲弁」は、くらし言葉である出雲弁を、出雲人の暮らしをとおして語らせるという試みです。脳裏に残るかつての暮らしぶりを、出雲弁をとおして復元・記録する試みでもあります。その意味で、本書は出雲弁や出雲人の日常を後世に伝えていくための一里塚です。素人編集で行き届かない点多々あろうとは思いますが、少しでも出雲弁を楽しんでいただき、愛着を持っていただければ幸いです。

作成にあたっては、藤岡大拙先生、友定賢治先生の指導を受けつつ、多くの保存会会員の皆様のご協力のもとで編集することが出来ました。心よりお礼を申し上げます。

宍道・出雲弁保存会
会長 目次 実

目 次

1, 出雲人の一生

子どもの誕生と命名	1
お七夜	3
宮参り	5
お食い初め	7
初節句	9
初誕生	11
ひも落とし	13
嫁選び 婿選び	15
婚礼	17
地蔵かつぎ	19
妊娠から出産へ	21
厄年 年祝い	23

2, 出雲人の年中行事

年始(元日)	25
七草粥	27
トンドさん	29
節分	31

彼岸（春分、秋分）	33
田植え、泥落とし	35
端午の節供	37
正月ごと	39
七夕	41
盆	43
神在月と神去出（カラサデ）	45
正月の餅つき	47
3, 出雲弁くらし言葉	49

くらしの中の出雲弁

出雲弁は人々のくらしの中から生まれてきた言葉です。オンボラとした語り口は古代からの出雲文化を今まで語り継いできた言葉でもあるのです。21世紀、人々は地球を駆けめぐり、英語など少数の言語で情報が飛び交かう中、日本の一方言である出雲弁の生粋話者は徐々に少なくなってきました。本書は「出雲人の一生」や「出雲人の年中行事」でみられる様々な習俗を取り上げ、その一場面を出雲弁で紹介します。民俗紹介やそこで語られる出雲弁は島根県八束郡宍道町での事例を参考としました。時代設定も概ね昭和10～30年頃の家での会話を想定してみました。

*民俗紹介は、『宍道町史通史編下巻』で山崎節枝さん、品川知彦さんが調査された事例等を参考としました。出雲弁の会話は太田実さんの原作をもとに、宍道・出雲弁保存会役員会でまとめました。写真は本文と直接の関係はありませんが、故長富利助さんが昭和10年代頃に撮影された宍道町内の風景などを掲載させていただきました。そこで語られた言葉も出雲弁だったのでしょう。

1, 出雲人の一生

子どもの誕生と命名

「名付け」は生まれてから一週間以内でなされるのが一般的で、お七夜に名付け祝いをしました。名前は子の父親や祖父が付ける場合が多かったようですが、地元の知識人や神職、親戚の者に頼む場合もありました。命名にあたって、床の間や神棚に子供の名前を書いた半紙を張りました。

(出雲弁：お婆ちゃんの会話)

お婆ば「『名は体を現す』てて、よーえったもんで、みかしの名前は聞いたほどで『こら、おなごん子だ』てて、じきね わかーにからね、えまごーの子は 漢字で書いてあーと、当字みたいな名前が多て、きびし よめませんでしわ。そーだけんだらか、えまごーの子は わーわからみーと、なにかんがえとーだいわからんやな子が おえやなが……。おちの じーさんは、おなごん子だったら『ルミ』『アケミ』『マリ』だことの、わあーがしっとー ハイカラげな名前を 片っぱしから えってだもんだけん、わけもんから 相手にしてもらえんで、しねとらいました。まーじけ、ほんね。」

(意味)

お婆ちゃん「『名は体を現す』とは、よくいったもので、昔の名前は聞いただけで『これは女の子だ』と、すぐにわかったのに、今頃の子は漢字で書いてあると、当て字みたいな名前ばかりで、とても読めません。それだからでしょうか、今頃の子は私たちから見ると、何を考えているのかわからないような子が多いようだが……。うちのお爺さんは、女の子だったら『ルミ』『アケミ』『マリ』などと、自分が知っているおしゃれそうな名前を片っ端から言われるものだから、若い者から相手にしてもらえないで、すねておられましたよ。まあ一、ほんとうに。」

お七夜

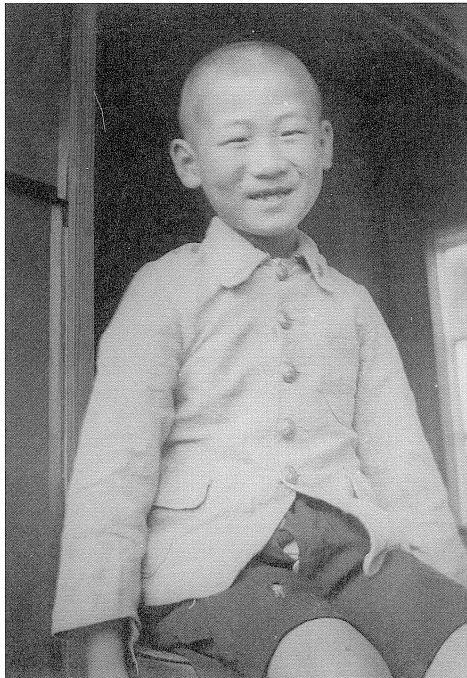
生後七日目の祝いで、里の親、産婆さん、親戚などと呼んで、生児の名前を披露してその誕生を祝いました。生児の里からは、産着、布団、かいまき、おむつなどの祝いをもらい、これを「孫ごしらえ」と言いました。本家などの親戚からは、ご祝儀の他、三つ身の着物ができるくらいの八尺の反物をもろう場合もありました。祝い膳を用意したり、紅白の祝い餅を振る舞ったところもあり、産婆さんの役割もこれで終了です。

(出雲弁：お姉ちゃんの会話)

あねさん「えもっちえの おなごん子は 予定より ちょんぼこばやに おまれーやな 気配で、おっつあんが はやはやで産婆さんと呼びん えかいたげな。産婆さんは でれんでれんで 自転車を こいでこらいて 間にあったね、わたしの弟は、『あの子は おまれた時に 産婆さんが えそいで 来らいて、あがーかまついで けちまじいて、草履を 履いたまんま 子どもん顔を 踏まえただけん、そーで あぎゃん のっぺーした 顔になったげな。』ついで、上のあんちゃんの だらじばなしを、えまんごーでも しんじとうます。」

(意味)

お婆ちゃん「分家の女の子は予定より少し早く産まれるような気配で、叔父さんが早々で産婆さん呼びに行かれたらしいです。産婆さんはデレンデレン（はやはや）で自転車をこいで来られて、（お産には）間にあったのだけれど、私の弟は、『あの子は産まれた時に、産婆さんが急いで来られ、上りかまちでつまずいて、草履を履いたまま子どもの顔をふんだものだから、それで、あのようなのっぺりした顔になったらしい。』という、兄さんの冗談を今頃でも信じています。」



宮 参 り

生後、男子は三十日目、女子は三十三日目に参り、氏神様に共同体の一員となった報告の意味をもつ儀式でした。母親と姑が赤ん坊をつれて参り、帰りには、まっすぐに家には帰らず、近所や親戚の所によって挨拶をしました。宮参りをしてから客を呼んで祝いの膳を囲んだり、一旦家に帰ってから「里行き」したところもあります。この後、子供はひも落としまで、宮参りはしませんでした。

(出雲弁：お婆ちゃんの会話)

お婆ば「みかしん子は、ほんね 猿の顔を くちゃくちゃにしたやな 顔をしちょう子が 多かったやなが、そーだけんだらか あげん だれんも あいそついかって『お母さんに似て かわいげなこと。』などと、えわれんんだったもんですわ。『まあ、元気な子だこと。』が まあ えとこで、じょうじついかって『まー元気の え 男の子。』なんちゃなこといーと 後がえけん。口とんぎらかいて『こら おなごん子でしが。』てて えわっしやって、たいした えぼふらいたことも あーましたわ。」

(意味)

お婆ちゃん「昔の子は、本当に猿の顔をくちゃくちゃにしたような顔をして

いる子が多かったようですが、それだからでしょうか、あんなに誰も愛想つかって、『お母さんに似て、かわいいですね。』などと、言えなかったものでした。『まあ、元気な子だこと。』と言うのがいいところで、上手使って『まあ、元気のいい、男の子。』なんてことを言うと、後がよくありません。口を尖らせて『これは、女の子ですよ！』とおっしゃられて、たいそう不服そうにされたこともありました。」



お食い初め

生後百日目に、赤ん坊に、初めて飯粒を食べさせる儀式です。小豆ご飯を炊き、尾頭付きの鯛を添えた膳を用意して、家族で祝いました。たとえ食べなくても、食べさせるまねをさせ、この時に、子供用の膳、茶碗などを揃えました。

(出雲弁：お母ちゃんの会話)

おかさん「じんどしたの子は ちょんぼし はやね おまれたけんだらか、上のあんちゃんやちに くらべーと ちとこまかったでしわ。おじじや、おばばも、じんど しんばいして『百日のまま食いにゃ まんだ よ一食わんじね。』てって はないとらいました。だども、じんびしてみーちーと おもったよーも まげね くれたやな かっこをしてごいて あんしんしました。えまは きょうだいじーで えついはんの えけじね なーましたわ。」

(意味)

お母ちゃん「一番下の子は少し早めに生まれたからでしょうか、上のお兄さんたちに比べて、少し小さかったです。そのために、お爺さんも、お婆さんも大変心配して、『お食い初めでは、ご飯は食べないでしょうね。』と話しておられました。ですが、準備してみると思っていたよりよく食べるようなしぐさをしてくれて、だれも安心しました。今では、兄弟の中でも一番のいたずらっ子になりました。」



初 節 句

生まれて初めての節句を祝うことで、全国的に女の子は3月、男の子は5月の節句に祝いますが、出雲地方では今でも旧暦で祝っています。女の子は雛人形を、男の子は幟、武者人形、天神飾り等を里から贈られました。大正頃までは武将の絵を染め抜いた武者幟が多かったようですが、昭和時代になると、鯉のぼりも登場し始めました。親戚などから祝いをもらうと、お返しに膳などを用意しました。

(出雲弁：お母ちゃんの会話)

おかさん「おらも、こだからにゃ めぐまれて よかったですが、おとっつぁんは なんにもしてござれんで えらいめしましたわ。そげえわ えついばん はじめの子が おとこん子だったもんで、そら おじじの 喜んでだのなんだのてて、なんとも えわれん 程でしたわ。そーで こばやから『てんじんさんは おらが かーけんの。』てて、えわっしゃっと一ました。ちーとばかーして まついえの、たてまついの にんぎょやさんへ えかっしゃって、『ここで えちばん がいなやちを ごさっしゃい。』てて、たのまいたげなで、やんがて おおけなやつを ふろしきちちんして にっこにっこして 背中んおって もどってこりました。えまでも ちゃんと かざーましじね。」

(意味)

お母ちゃん「わたしも、子宝に恵まれて、良かったのですが、お父さんは何もしてくれないので（子育てには）苦労しました。そういえば、一番初めの子が男の子だったので、そりゃあ、おじいさんが喜んだのなんの、何とも言われないほどでした。そこで、早いうちから『天神さんは、私が買いますから。』と、おっしゃっておられました。しばらくして、松江の堅町の人形屋さんに行かれて、『ここで一番大きなものを、くださいな。』と、頼まれたそうで、やがて、大きなもの（人形）を風呂敷包みをして、ニコニコしながら背中に背負って帰ってこられました。今でも（節供になると天神さんを）ちゃんと飾りますよ。」



初 誕 生

生まれて一年目の誕生日を祝うことを初誕生といいます。里の両親を呼んで祝いましたが、親類、産婆を呼ぶところもあります。子供の前に算盤、筆、米（盆に入れて）、お金等を並べて、どれを選ぶかで将来を占いました。女の子には算盤ではなく、物差しを置きました。また、一升餅を背負って歩かせ、わざと転ばせ、泣く程良いとされました。餅は、重ね餅の場合が多く、袋に入れて背負わせたり、おぶいひもでたすきがけにして背負わせたりしました。男の子は母親の帯、女の子は父親の帯で背負ったり、一升餅二重ねを紅白の袋に入れて、帯でくくって背負させたところもあります。また、誕生前に歩いたら、「一升で、棟の見える数ほど餅を作って配ると良い」といわれました。頂いたお祝いにはお餅についてお返ししたといいます。

(出雲弁：お婆ちゃんの会話)

お婆ば「おじしは 孫の初誕生だてて、こばやから 長盆にね
そろばん、ふで、こめ、せね（銭）をならべ 床の間ね じんび
しておらっしゃった。しゃんうちに、『どーを えついばん先に
とーだらか。』てて、嫁さんの里から おやしやちが きてだま
でね ためしてみたん なっただけな。おじしはちーと よくな
けん、せね（銭）を とーやねと おもっとらいたげなが、わり

ことにね 孫があったして 盆がふっく一かえって、中の米を
座敷じーに 散らかいたげな。里から 来らいまでに はやはや
で 米を ふろわんならな えけんね、わーが かってに やっ
とらいたことだけん、ひとに こえしーわけにえかず、孫を お
こーわけにもえかず、ふとーで 座敷を はっとらいたげな。まー
じけ よけなことを さいもんだけん、こぎゃんことだがね。」

(意味)

お婆ちゃん「お爺さんは孫の初誕生だといって、早いうちから長盆に算盤、筆、米、お金を並べ、床の間に準備しておられました。そのうちに、『(孫が)どれが一番先に取りのさるうか。』と、嫁さんの里から親御さんたちが来られるまでに、試してみたくなつたそう。お爺さんは欲張りだから、お金を取るよつと思つておられたよつだけれど、悪いことに、孫があばれて盆がひっくり返つて、中の米を座敷中に散らかしてしまつたそう。里から来られるまでに早々で米を拾わなくてはならなくてははいけないのに、自分で勝手にやつておられたことだから、人を呼ぶわけにもいかず、孫を怒るわけにもいかず、一人で座敷を這つておられたそう。ほんとに、余計なことをされるものだから、こんな事です。」



ひも落とし

全国的には、数え年三歳、五歳、七歳でお宮参りをする所謂「七五三」が一般的ですが、島根県内では数え年四歳を祝う「ひも落とし」が一般的です。オビナオシともいい、数え年四歳になった幼児が、初めて付けひものない四つ身の着物を着て帯を締め、氏神に詣でるといふ儀式でした。大人と同じ様式の着物を着ることで、子供としての生命の不安定な時期を一応脱したという事を象徴させるという意味合いがあったのでしょう。11月15日頃に行われ、あらかじめ里から祝い着一式が贈られ、当日は里の両親が客として招かれました。昭和初期までは里だけでなく近所や親戚が、祝いの気持ちとして、反物を持って来る場合もあり、家では祝い膳を用意して会食しました。

(出雲弁：下のおんちゃん(10才)の会話)

下のおんちゃん「こっつんほでは、四つで『帯直し』をしちよーます。よそんほは ちとハイカラさんで、ちょんぼ 上品げね『すついごさん』てて、いーげな。こないだ『こら、なんのかじかね。』てて、聞いたら、となりのおんちゃんが『子どもん宮参りね、かかさんが七万円で きーもんを こっさえらいて、子どもねは五しえん円で ええきーもんをかって、おとっつあんにか 三百円で えわえの 酒を よおえをしてあげて、そのかねの かー

かぐあいだが。』 てて、おっせて ございました。えらい、かー
かもんだわね。」

(意味)

下のおんちゃん「この地方では、4才で『紐落とし』をしています。他の地方はハイカラで、少し上品に『七五三』と言うようです。この前、『これはなんの数字ですか。』と、聞いたら、隣のお兄さんが、『子どもの宮参りに、お母さんが七万で着物を作られて、子どもは五千円で良い衣装を買って、お父さんに三百円でお祝いのお酒を用意してあげて、お金の掛かり具合ですよ。』と、教えて下さいました。大変、(七五三にはお金が)かかるものですね。」

* 昭和30年頃、初任給は一万円ぐらいだったと言います。



嫁選び 婿選び

昭和20年代頃までは、仲人が家同士の結びつきとして婚姻を取り持つのが一般的でした。仲人のことは、「コージニン（さん）」「ナカウド（さん）」などと言いました。コージニンは世話好きで世間の広い人のほか、親戚筋の者が世話をする場合もありました。当時の縁組みでは家格の釣り合いをまず重んじていました。

コージ人は親同士の間に入って話を進め、本人同士は婚礼の当日までは顔を合わせないことが多かったといます。お見合いをしたり、写真を見せて貰うこともありましたが、一般的ではありませんでした。

戦後は恋愛結婚も少しずつ増え、昭和20年代に盛んだった、演芸会なども楽しい出会いの場でした。このような場合には、形式を整えるためにコージ人を仲介に立てました（立てコージ人）。昭和30年代になると現在とほぼ同様の見合いが一般的になり、恋愛結婚もだんだん珍しいものではなくなりました。

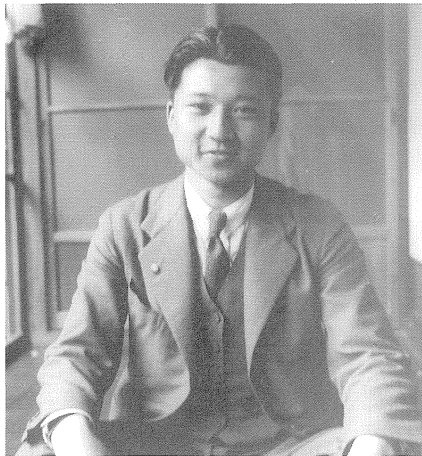
（出雲弁：世話好きのおっつあんとお母ちゃんの会話）

世話好きのおっつあん「あしこの もしめさんも、ええとしかっこに ならえましたわ。ほんね、お前さんとこの わけしが もらってごいてだど えーだものう。このしゃしんに うつつちょうやね、えらい べっぴんさんだが、えけんだらかね？」

おかさん「おちの子も ええとしてしけんね。け、なんが気にえらんたい、えーはなしだし、きゃん話しをみけても、そばで聞いちょー お父つあんにみかって『そげん、えーしなら おまえがもらーだわな。』なんててえって、ととろかんで えけませんが、どげぞ なーませんかいねえ。」

(意味)

世話好きのおつつあん「あそこの若い娘さんも良い年頃になりました。ほんとうに、あなたのところの若い人が（嫁に）貰ってくださると良いのだけれど。この写真に写っているように、たいそう美人ですが、どうでしょうか。」お母ちゃん「うちのも良い年齢ですから。本当に、何が気に入らないのか、良いお話だし。（息子に）このような話をむけても、傍で聞いているお父さんに向かって『そんなに良い人なら、おまえ（お父さん）が貰えば。』などと言って、本気にして聞いてくれませんが、何とかありませんかねえ。」



婚 礼

昭和40年代以前は結婚とは本人同士の結びつきよりも嫁（婿）が他家に入るという考えが一般的でした。婚礼はコンレイ、シェウゲン、ヨロコビ等と言い、ヨロコビは主に披露宴を指しました。婚礼にはいくつかの段階があり、地域差というよりも各家の習わしによってそれぞれ少しづつ異なっていましたが、概ね、[出立ち（出婚礼）→入家→盃事→披露宴（ヨロコビ）→宮参り]の順で行われました。「出立ち（でたち）」とは本来は嫁が生家（里）を出る前にもたれる祝宴を指しました。

今では婚礼の形式も大きく変化し、結婚式場等で婚礼・披露宴を行う例が一般的となりました。

※ 嫁入り行列が唱う唄 『どこかここかと尋ねてきたらここが殿御のいるところ～』

※ 嫁の両親が帰るときに唱う唄『鹿の鳴く声聞けば～が恋してなあ、雨は縦には降る けれど横には降らない～』

（出雲弁：近所のおばさんとお母ちゃんの話）

近所のおばさん「こなえだ、お前さんとこの えちばんおえのもしめさんが、えもっちえの わけしと しんじこばたで たのしげね しゃべくっちょらいとこ みたわね。け、あげん えしが おってなら おーてて えってごいてなら えーねからにね。」

おかさん「しゃんこと えわいても、おついんこは ふだん なんだえ えわんけん、わーわも わかーましえんでしたがね。『今度、えっしょね させてごせ。』てて、よんべんなって ふたーしていーもんだけん、け、だれんも おべはつけましたわ。おばさんにゃ あげね せわをたのんどったねねー、ほんね しんませんわ。」

(意味)

近所のおばさん「あなた、この間あなたのところの一番上の娘さんが、分家の若い人と宍道湖端で楽しそうに話してしておられるところを見ましたよ。ほんとに、あんな良い人がいらっしやるなら、(相手が) いると言ってくださったならよかったのに。」

お母ちゃん「そんなことを言われても、うちの娘も日頃何も言いませんので、私たちも分からなかったのですよ。『今度、一緒に(結婚)させてください。』と、ゆうべになって二人して言うものだから。本当に、誰もびっくりしました。叔母さんにはあれほど(結婚の)お世話をお願いしていたのにね、誠にすみません。」



地蔵かつぎ

昭和20年頃までのことですが、婚礼の時に若い衆が婚家の庭先や玄関先に石地蔵を置きにくる「地蔵担ぎ」という奇妙な風習がありました。もてなしが良いと担いできた地蔵は持って帰りますが、もてなしが悪いとそのまま置いて帰ったといいます。ただし、この風習も酒を振る舞う余裕のあるところに持って行ったようです。

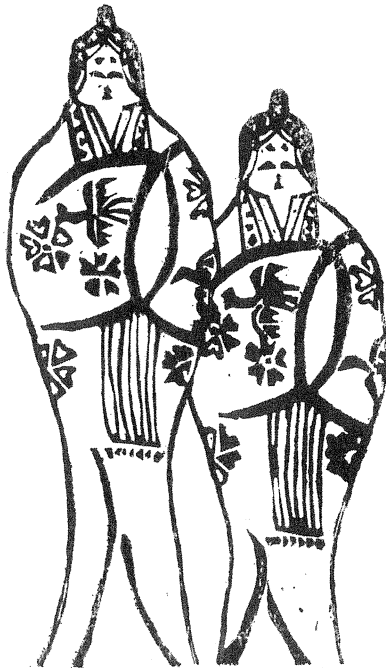
(出雲弁：近所の爺さんとその婿さんの会話)

近所の爺さん「きんによは けっこんしきで、ちょんぼし けつって、もてなしが わーかったさで、じぞさんを ねわに おいてけぼーに さいて しまったわ。このじぞさんは、わけしやついが どこかー もそんで きただいら、わからんかいねえー。」
婿さん「えもっちえの おばさんに聞いたら、『そら、延命じぞさんだねかねえ。』てて、えっとらいたでしが、そぎゃんとこ覗いて見たことねけん きびし わかーませんが、『どげしてもどえたら えかいね?』てって 聞いたら、『ほんなら、もえっぺん わけしやついを よんで、もてないて、もどえて もらわれりゃー えーがね。』てて、えわいましたわ。」

(意味)

近所の爺さん「昨日は結婚式で、少しケチってもてなしが悪かったようで、お地藏さんを庭に置いてきぼりにさせていただきました。このお地藏さんは、若い人たちが何処から運んで来たのか、わからないですかねえ。」

婿さん「分家の叔母さんに聞いたら、『それは、延命地藏さんじゃないですかね。』と、言っておられたけれど、そんな、そのような場所は覗いたことがないので、さっぱりわかりませんよね。『どのようにして返すとよいですか?』と聞いたら『それなら、もう一度若い人達をよんで、もてなし（ご馳走を）して、返してもらわれれば良いですよ。』といわれました。」



妊娠から出産へ

妊娠五ヶ月目の戌の日に、里から晒し木綿一反（腹帯）をもらって腹に巻く「帯祝い」をしました。病院での出産が普及するまでは帯祝いの時に初めて産婆さん（とりあげばあさん）を呼んだところが多く、産婆さんは出産までの間に何度か「ハラトリ（診察）」に来てくれました。お宮参りをする場合、安産祈願はそれぞれの家の氏神さまにお参りする程度でしたが、中には直江の御井神社や加茂の子安観音に参ることもありました。出産後は、折を見てお宮に御礼参りをしました。

（出雲弁：お母ちゃんの会話）

おかさん「まあーじけー、おちが ちょんぼし ふとっちょって、したばらが でちょうけんてて『おめでたかね？』てて、えもっちえの おつつあんが 声しちゃったが、『せたもんだらぞ、このとして・・・』てて えったら、『・・・えんや お前さんは まんだ わけことだけん、出来一わね。』てて、えわっしやったがね。おとつつあんは わらっとらいたが、け、まあーじけほんね！！」

(意味)

お母ちゃん「まあ私が少し太っていて、下腹が出ているからといって『おめでたですか。』といって、分家の叔父さんが声をかけられたのだけれど、『しょうもないことをそれはないですよ、この年齢で・・・』と、言ったら、『・・・いや、あなたは、まだ若いことだし、(赤ちゃんが) できますよ。』と、言われました。お父さんは笑っておられたけれど、本当に、まあ！」



厄年 年祝い

災いを受けやすいと信じられている年齢を厄年といいます。全国的にも数え年で男は25歳と42歳、女は19歳と33歳と考えられており、お宮さん（氏神）に詣でて、祈念してもらいます。33歳で子供を産むと厄落としになるとも言われています。また、厄落としとして、正月に、中折れにお米を入れて鳥居の方に後ろ向きに投げ、この時に、振り返ってはいけないと言われました。実道町では女の子の十三歳を「十三誕生」として、厄落としをした所もありました。年祝いは節目節目の年齢を祝うことですが、初誕生、ひも落としもこの中に含まれます。他には、還暦、古希、米寿などが祝われ、厄除けや年祝いの場合、同窓会などで一堂に会することも多く、旧友に会うひとつの楽しみになっています。各家庭で祝う場合は次のようなものがあります。

還暦（60歳）：子どもたちが着物を作ってくれた

喜寿（77歳）：半紙に「喜」と書いて、フキダケを付けて近所に配った。

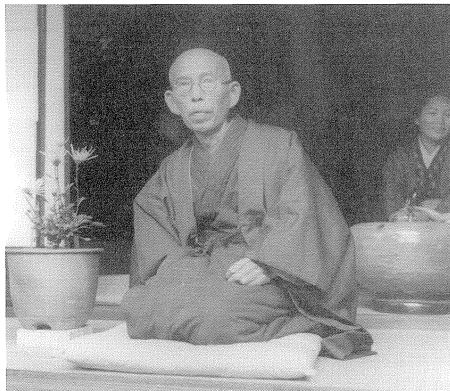
米寿（88歳）：自分が神事で使った箸を配った。八十八合の餅祝いをした（八升八合の餅をついて地区中に配った）。孫達が祝った。

(出雲弁：お父ちゃんの会話)

おとさん「隣のおじじは、おちの 墓の 石塔をみて、『この
虎おじじは、昔は えーとしの えんきょさんなやね 見えたに
ね、こげして 脇の年号を見一と、わーわやちが もはい きじ
で 七十七だけん、とんとに おいこいちょーわ。』てて、かん
しんしながら せんこ あげて おがんでごさいたげな。だんだ
ん、だんだん、としょーさんも ごつとが 長生きさいて えー
ことだわね。」

(意味)

お父ちゃん「隣のおじいさんは、うちの家の墓の石塔をみて、『この虎おじいさんは、昔は大変高齢の隠居さんに見えたのに、こうして（石塔の）脇の年号を見たら、私たちが、もう既に喜寿（きじゅ）で、七十七才ですから、（亡くなった年齢を）追いついていますね。』と、感心しながら、線香をあげて拝んでいたようです。ありがとう、ありがとう。高齢者の方もだれも長生きされて、良いことです。」



2, 出雲人の年中行事

年始（元日）

本家や世話になった家などになされる年頭の挨拶のこと。年始の客は座敷に上がって主人と挨拶をかわし、屠蘇（とそ）やおせち料理などを振る舞われました。多くの年始客が集まる家では略式に戸口で挨拶をすませたり、さらにそれを簡略して名詞受けのみですませるようになり、年賀状もそこから発生したと言われます。地区によっては、各世帯から世帯主が集まって、新年の挨拶を交わしました。

（出雲弁：お爺ちゃんの会話）

おじじ「みかしは、正月なんかで ちくで あついまーと、親方から 順ね ねま一場所が きまっちゃう もんでした。ちかごー そげだねやになって『こらこら、おまえさんは もっとかしらだがね。』てて、えっても、『えんや、おらはここで えが。』てて、なかなか きまーません。だけん、えまごーは、家順ね ねまーやね きめとらいとこも あーげなわ。」

（意味）

お爺ちゃん「昔は、正月などで（新年の挨拶のために）地区で集まると、親

方さんから順番に、座られる場所が決まっているものでした。近頃そうゆう（慣習が）なくなってくると、『こらこら、あなたは、もう少しかしら（上座）ですよ。』と、言っても『いやいや、私はここの（席で）いいですよ。』と言って、なかなか場所が決まりません。そこで、今頃では家順で座る場所を決めておられる所もあるようです。」



七草粥

七日正月に七草（セリ、ナズナ、ゴギョウ、ハコベラ、ホトケノザ、スズナ、スズシロ）を食べる行事のことです。病気を防ぐ効用があるとされます。

（出雲弁：下の姉ちゃんの会話）

下のあねさん「正月に なあーと、もちや、えーごっつお なんかい、腹えっばい 喰ったー、のんだー しーもんだけん、きびし胃が くたびれーがあ。そーで『ちょんぼー、やさいけなもんを 喰え。』つう、みかしからの 生活の知恵が『七草粥』だけな。そげえや このあえた『ななくさ』と よめで、お母ちゃんが よーえわい『しついくさ』てて えったら、お父ちゃんが それきいって『しゃん はつかしげなこと、よそで いーなや。』てて、わらわいた。なんでだーか？」

（意味）

下の姉ちゃん「正月になると、餅や豪華なご馳走などを、腹一杯食べたり、飲んだりするもので、たいそう胃がくたびれますよね。そこで、『少し、野菜ものも食べなさい』という生活の知恵が『七草粥』だそうです。そう言えばこの前「ななくさ（七草）」と読めなくて、お母さんがよく言っておられる「しちぐさ（質草）」と言ったら、お父さんがそれを聞いていて『そんな恥ずかしいようなことを、よそ（の家）で言うんじゃないよ。』と、笑われ

ました。何ででしょうか。」

* 質草（しちぐさ） 質に入れる品物。質草を担保にお金を借りる質屋は、庶民の金融機関的な役割を果たしていた。



トンドさん

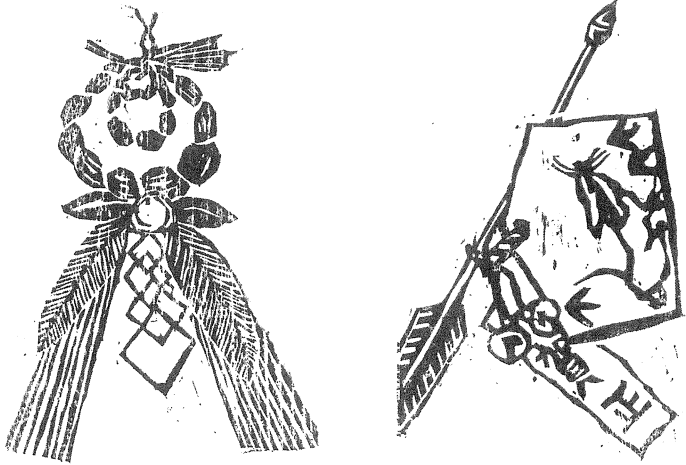
小正月に行う火祭り行事で、トンド、トンドヤキ、トンドさんなどと呼びます。正月飾りを焼いたり、正月の神送りを行ったりします。また、厄落としの行事が伴って、団子や餅を焼いて食べると病気をしないと、火の燃え方や心棒のたおれ方でその年を占ったりもしたところもあります。

(出雲弁：あんちゃんの会話)

あんちゃん「ちょんぼ ふれとこで 竹で『とんが一ぼーし』みたいなもの ころっさえて、めーめーの家から 正月ね かざった しめなわだことの 古い御札や 去年の お守りやなんかえもってよらいて、竹に ふをつけて もやかさいます。子供は、冬やしみの しくだいの 書初めを えっしょにして もやかします。たけとこまで あがーと、しーじが まんなーげなだども、ふが ついたまんまで たけとこまで あがーけん、ちけとこねい けども ありゃ あふなて あばかんでしがね。そーから、もついを やいてくーと えたしんならん ててえって、だれんもが やいて くーわ えだども がっしょで 喰いしぎて、はらを ねじられーもんが たまね おーましたが。」

(意味)

あんちゃん「少々広いところで、竹で『とんがり帽子』みたいなものを作り、各自の家から正月に飾った注連縄や古い御札、去年の御守りなどを持って寄られ、竹に火をつけられます。子供は、冬休みの宿題の書き初めを、一緒に燃やします。(火のついた紙が)高いところまで上がると、習字がうまくなるらしいですが、火がついたまま高いところまで上がるので、近いところに家でもあれば、危なくていけません。それから、(トンドさんの火で)餅を焼いて食べると病気になるないといって、誰もが焼いて食べるのは良いけれど、一生懸命食べ過ぎて、腹痛をおこす者が時々おられます。」



節分

立春の前日。節分に豆をまく行事は京都では室町時代から始まり、「鬼は外」の唱えことばも行われていました。豆まきの後に、豆を自分の年の数より一つだけよけいに食べたりするのは、年を一つ重ねる日だったことを物語っています。

(出雲弁：お爺ちゃん会話)

おじじ「孫が ほえくしょで、おにを かかんと えけんてて、まさか かくだんになーと、おぜもんだてては わかっちょーだども、どげんふーね かいてえだやら わからんだったげな。そのぼんね、おとっつあんが さけのんで かおをあかんして もどらいと、おかさんが『今日は せついふんだけん はやこともどーやね、あげん えっとったね。』てて、がいね おこっとらいたでしわね。孫は、そのかおみて、『ほんとの おにでも、こげんおぜこと ねだらね、きゃんふに かきゃ えかったんなあ。』と、思ったげな。嫁ねは、ないしょの はなしですじね。」

(意味)

お爺ちゃん「孫が保育所で鬼を描かなくてはいけなくなったのですが、まさか描くようになると、(鬼は)恐ろしいものだとは分かっているけれど、どう描いて良いか分からなかったようです。その夜、お父さんがお酒を飲んで顔を赤くして帰ってこられると、お母さんが『今日は節分だから、早く戻っ

てくださるように、あれほど言っておいたのに。』と、たいそう怒っておられました。孫は、その（お母さんの）顔を見て、『本当の鬼でもこんなには恐ろしくはないだろうに。こんな様に描けば良かったのになぁ。』と、思ったそうです。嫁には内緒の話ですよ。」



彼岸（春分、秋分）

春分・秋分の中日とその前後3日間、併せて7日間のことです。この時期に寺院で彼岸法要が営まれることから、彼岸と言います。家庭では、ぼた餅（おはぎ）を作り、仏前に供えました。

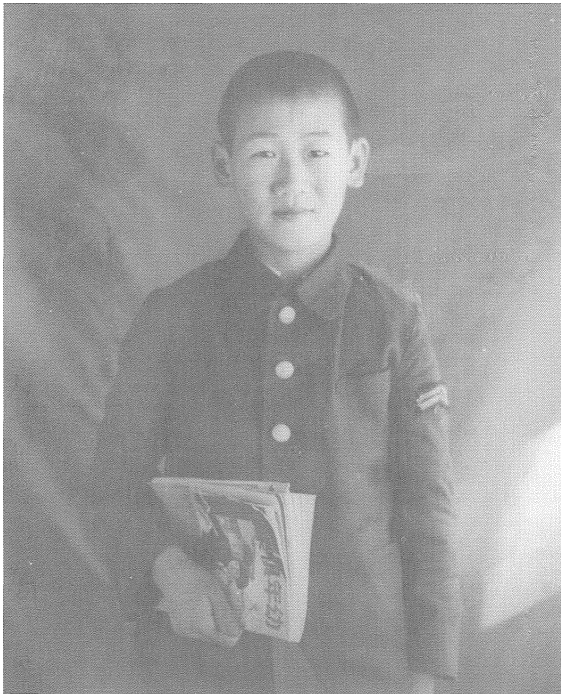
（出雲弁：お父ちゃんの会話）

おとさん「『あつさ、さむさも、ふがんまで』とは、まあ よーえったもんで、春のふがんが しぎーと ひーは のくんなーます。そーでも、やっぱー、あさまんがたや よーになーと、まんだ さむですわ。そげいや、ふがんさんねは、ポタモチを ほとけさんに 供えてから、ちょんぼしーと さげらいて そいついをみんなで 喰います。おらが わけころは、さとけも しくなし、たまねしか くわせて もらえんだったもんでしが、ひがんさんねは とくべついだてて、ポタモチの おえから さとを あーたき 掛けて くわせてもらったもんです。まかったでしわ。ちょんぼ 前までの なつかしい おもえででしわね。」

（意味）

お父ちゃん「『暑さ寒さも彼岸まで』とは、良く言ったもので、春の彼岸を過ぎると昼は温くなります。それでも、やはり、朝方や夜になると、寒いですわ。そう言えば、彼岸さんにはぼた餅（おはぎ）を仏さんに供えてあげて、しばらくすると下げられたものを皆でいただきます。私が若い頃には砂糖も

少なくて、たまにしか食べさせてもらえなかったものですが、彼岸の日は特別だということで、ぼた餅の上から砂糖をたっぷり掛けて食べさせてもらったものです。おいしかったですよ。少し前までの懐かしい思い出ですよ。」



田植え、泥落とし

田植えは稲作の中でもっとも重要で、労力のいる作業です。泥落としは田植えが終わり、集落などで行う行事で、酒食を用意して田植えの労働を慰労し、田の神を送り祝います。集落によっては美保神社（美保関町）へお参りすることもあったようです。

（出雲弁：兄ちゃんの会話）

あんちゃん「ちーがっこになーと、農繁期だてて ふーまででがっこを しまつて、えんで てごしーやに なーました。お父ちゃんに『ここのたんぼは ふれけん、たうえねわ めっかは かかーだらがね』と言つたら、『そげん なぐさんやね さぼつとつたてて えけんが、えつついんついで やつてしまーじ。』てて、おこらいました。たんぼん ことだてて、わからんやなことが えっばいあーます。そげいや、ほせころね『たんぼの ばぼふきを しーじ！！』てて、お父ちゃんやちが えつとらいて、『おばばを ふっばつて、どげさいだらか？』てておもつて、おばばに 聞いたら、がいね わらわいました。」

（意味）

兄ちゃん「中学校に（行くように）なると、農繁期だということで昼までで学校を終え、家に帰つて手伝いをするようになりました。お父さんに『この田圃は広いから、田植えに三日は掛かるでしょう。』と言つたら、『そんなに、

遊ぶように（仕事を）してもいけない。一日でやってしまうぞ。』と、怒られました。田圃のことだといっても、分からないようなことがたくさんあります。そういえば、小さいころ、『田圃のパバ引きをするぞ。』と、お父さんたちが言うておられて、『お婆ちゃんを引っ張ってどうされるのだろうか。』と思い、お婆ちゃんに聞いたら、たいそう笑われました。」

* パバ引き 田植えをする前に、植付け位置を示す線（升目）引き作業。



端午の節供

5月5日に行われる年中行事で、雨期に入るこの時期に毒気を払うヨモギや菖蒲（ショウブ）を門に飾ったり、菖蒲酒を飲みました。武家社会では「菖蒲」が「勝負」につながることから甲冑や武者人形を飾るようになりました。また、男の子の初節供には母親の実家や親戚から武者飾りや幟、立身出世を願う鯉のぼりなどが贈られました。家庭では、団子を笹の葉で巻いて蒸す「笹巻き（ちまき）」を作り、食します。

（出雲弁：お婆ちゃんの会話）

お婆ば「こなえだの ことでし。となりん 家んしが、まきを
 作らとして、まいこと えかだっただけながね。どーも、だんごを
 こねらとして まぜくーときね めじ加減を 間違いられたは
 で、ペッタペッタした のりみたいなもんが おべーほど 出来
 ただけな。また、しゃんときん まんがわることね、おしゃべな
 お婆さんが こらいたもんだけん、あっといーまね 地下^{しげ}じー
 ね ふろがって、わらいばなしね なーましたわね。ま、おちで
 は、まげん こっさえましけん しゃんこと ありゃしませんがね。」

（意味）

お婆ちゃん「この前のことです。隣の家の方が笹巻き（ちまき）を作ろうと

して、うまくいかなかったそうです。どうも、団子を捏ねようとして、まぜるときに水加減を間違えられたらしく、ぺったぺったした糊みたいなものが驚くほど出来たらしいのです。また、そんなときに運が悪いことに、お喋りなおばさんがいらっしゃったものだから、あっという間に隣保（近所）内の笑い話になりましたよ。まあ、うちでは上手に（笹巻きを）作りますので、そんなこと（失敗）はありませんけれどね。」



正月ごと

正月は年の変わり目として、吉凶も一つの区切りとする感覚がありました。このため、正月が過ぎて半年ぐらいたっても状況がよくなる場合は、「正月ごと」をおこない、運勢の好転を願いました。

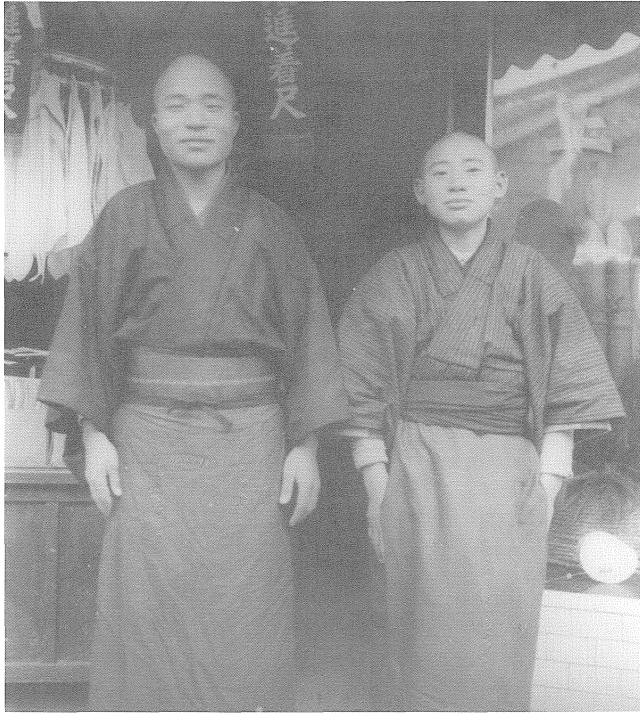
(出雲弁：お父ちゃんの会話)

おとさん「みかしは、はんとしたって まいことえかんと、また、正月をしました。そーが、『正月ごと』でやんす。めやで、かまの いを わかいて 湯立てをし、その いを 持つかえって、いえの お払いをします。そげしーと、まず 6ねんせくらえの おとこんこが、せんとうで ししをかべって、もうふとーが はなたか面を かべーます。そーで、そのあとから ようついえんごまでが 家々のあがーはなで『ししわー』と、がいな声してから だれんもして ざしきを はだしぼしーで 駆け抜けーます。おわーと こどもねは えーもんを ごさっしゃって、そーがまた たのしみでした。ちーと、ちんてな きょうじでしたわね。」

(意味)

お父ちゃん「昔は半年たって良くなると、また正月をしました。それが『正月ごと』です。宮で釜に湯を沸かし、湯立て（神事）をし、その湯を持って帰って家のお払いをします。そうすると、まず6年生ぐらいの男の子が

先頭で獅子（獅子頭）を被って、もう一人が鼻高面を被ります。そして、その後から幼稚園の子どもたちまでが家の上がり口で『ししわー』と大きな声をしてから、だれもして座敷を裸足走りで駆け抜けます。（行事が）終わると、子供には良いもの（お菓子類）をくださいまして、それが楽しみでした。ちょっと珍手な（珍しい）行事でしたよね。」



七 夕

牽牛星と織り姫星が天の川をわたって会うという伝説や少女が星に芸芸の上達を願うという伝説が伝わっています。子どもたちは笹の葉に願いを書いた短冊をつけ、期間が過ぎると川や宍道湖に流しました。宍道町の町部の一部には、昭和30年ころまで、沖州（斐川町）から船に乗って、来訪者があり、七夕の行事をおこなったようです。

（出雲弁：お父ちゃんの会話）

おとさん「こめころの、おもえでしわ。えつねんね えっぺん、たなばたさん ころんなーと、みこじの ほから、子供やちがおせのしやついと えっしょね ふねんのって、『よーい。よい。てんでこてんの、たなばたさん。よーい、よい。』てて、たえこを叩えて にぎやかんして、こらいたもんでしわね。そげしーと、舟大工さんの 家の おしろんほの灘で こつつんほのものと えっしょね しいかや なんかい、はやいて 喰ったり さいました。その晩は、亀島さんで とまって、また、ついぎんひね ふねんのって えんでえかいました。みかしから、しんじのほど、みこじのほは、舟でのえききが さかんで、なんかと 深いついながーが あったもんでしわね。」

(意味)

お父ちゃん「子供の頃の思い出です。一年に一度、七夕さんの頃になると、向地の方から子どもたちが大人の人たちと一緒に船に乗って『ヨーイ、ヨイ。てんてこてんの七夕さん。ヨーイ、ヨイ。』といって、太鼓叩いて賑やかにしていらっしかったです。そうすると、船大工さんの家の後ろの方の灘（宍道湖岸）で、こちらの方の者と一緒に、スイカなどを切って食べたりされました。その晩は亀島さんで泊まって、また、次の日には船に乗って帰って行かれました。昔から宍道の方と向地の方は舟の行き来が盛んで、何かと深いつながりがあったのですよね。」

* 向地（むこち）：宍道湖の対岸、宍道から見ると現在の斐川町、平田市、松江市の湖岸沿い



盆(8月13～15日)

旧暦7月15日の盂蘭盆会（うらぼんえ）を中心とする前後数日の一連の行事のことです。13日に精霊迎え、16日に精霊送りを行います。

(出雲弁：お爺ちゃんとお婆ちゃんり会話)

おじし「ぼんね なーと、くびれた きーりね 足ついで、おまを こっさえーし、ぼてっとした なしびで おしを こっさえたもんだ。昔から、『ほどけさんが、ぼんさんね もどってこらいときは、はやこと もどらとして おまにのって、えのーときは、おちらと おしに のって えかい。』てて、聞かせらいたもんだわのう。」

おばば「えまごの こは りくついっぱい、おまえさんが しゃんはなしを さいても、『さ、めーしんだわね。』てて、あんまきいて ごしゃしませんがね。」

(意味)

お爺ちゃん「盆になると、くびれたキュウリで、足を付けて馬を作られるし、少し太い茄子で牛を作ったものですよ。昔から、『仏さん（祖先）が盆で（家に）帰ってこられる時は、早く戻ろうとして馬に乗って、また、（あの世に）帰られるときは、のんびりと牛に乗って行かれる。』と、聞かせられたものですよね。」

お婆さん「今頃の子は理屈っぽくて、あなたがそんな話をきかせてやっても、『そんなの迷信だよ。』と言って、あまり聞いてはくれませんよね。」



神在月と神去出（カラサデ）

旧暦10月を出雲地方では神々が集まる月として神在月よびます。カラサデは神在祭りの最後の日に出雲の地に集まった神々を送り出す神事です。出雲地方各地にはこのカラサデの晩に夜更けて勝手に出歩けば人さらいに会う、あるいはカラサデ婆に出会うと言って夜行を禁じたりしました。また、便所の神も帰ってくるので、便所に行くものは尻をなでられるとも言いました。

（出雲弁：兄ちゃんの会話）

兄ちゃん「ちかごーは、せんち（雪隠）ねも でんとか ついち
 ょーますが、こないだごーまでは そぎゃんもな あーませんで
 した。くらんなって、せんちへ えかとおもっても、なんぞおー
 やなきがして おせもんでしたわ。普段でも おせうえね、『か
 らさでさんの晩ね せんちへ えくと、かんさんが 尻一 なで
 らっしゃあじ。』てて、きかせらいた もんです。からさでさん
 の ばんねは、せんちへ えかんでも えーやね、めじけなもん
 を あんまー のまんやに しとーねからね、また、しゃんとき
 に 限って えきたん なーもんです。『えっしょに えかこい。』
 てて、ほかんもんね こえしーだども ついてきて ごしゃしま
 しゃん。おせだけん、うたなんか うたーだもん やっぱしおぞ
 て、おぞて、ションベをしたら、おしろは ふりむかんやねして

はしって かえ一ました。ほんね おぜもんでした。」

(意味)

兄ちゃん「近頃は便所にも電灯がついていますが、つい最近頃まではそんなものは有りませんでした。暗くなって、便所に行こうと思っても、何か恐ろしいような気がして恐ろしいものでした。普段でも恐ろしいうえに、『神去出(カラサデ)さんの晩に、便所に行くと神様がお尻を撫でられるよ。』と聞かせられたものです。神去出さんの晩は便所に行かなくても良いように、水気なものあまり飲まないようにしているのに、そんな日に限って行きたくなるものです。『一緒に行こう。』と他の者(兄弟など)に声を掛けますが、付いて来てはくれません。恐ろしいものだから、歌などをうたうのだけれど、やはり恐ろしくて、恐ろしくて、小便をしたら後を振り向かないように走って帰りました。本当に恐ろしいものでした。」



正月の餅つき(12月末)

餅はハレの日の食物で、重要な年中行事や人生儀礼の日に餅をつきました。正月には餅は欠くことのできない食物として暮れのうちにつくのが一般的で、普通は12月25日から28日までにつきました。

(出雲弁：お爺ちゃんの会話)

おじし「餅は、めでてときや、おれしときん なけらな えけん
つきもんですわ。そーだけん 正月や、まちーや、祝い事、ど
げだいしーと、わけもんが 都会から ちょっこー 戻って 来
たやなんかしーと、なんだいなても 餅だけは さいたもんでし
わ。近所の、ようついえんごは、『にたの おばあちゃんのお
うちは、えついも、餅ばっかー、くっとらい。』てて、えっとっ
たども ほんそごがくーてて べったー 餅を よおい さいた
げなでしわ。」

(意味)

お爺ちゃん「餅は目出度いときや嬉しい時に、なくてはならない付き物です。それだから、正月や祭りや祝い事、どうかすると、若い者が都会からちょっ
と戻ってこられたりすると、何もなくても餅だけは(ついて、用意)された
ものです。近所の幼稚園児は『仁多のお婆ちゃんの家は、いつも餅ばかり
食べておられる。』と言っていたけれど、かわいい子が来るというので、よ
く餅を用意して(待って)おられたようです。」



3, 出雲弁くらし言葉

出雲弁くらし言葉は、友定賢治先生の作成された出雲弁調査票をもとに、宍道・出雲弁保存会有志で記入したものです。出雲地方でも、地域によって異なる表現もあると思います。今回標記できなかつた調査項目もあえて残しています。読者の皆様も「出雲弁くらし言葉」の調査にご参加ください。

人に関する語

標準語	方言
父	おとさん、おとちゃん、おとつあん
母	おかさん、おかか
叔父	おじ、おつあん
伯母	おば、おばさん
兄	あんさん、あんや
姉	あねさん
兄弟	おとで
あととり	かかーご、よとーさん(代取りさん)、かしらご(頭子)
末っ子	おとんぼ、おとご
主人	あの家の主人～あしこのおつあん
主婦	あの家の主婦～あしこの家内し、あしこのおばさん
息子	わけもん、わけし、いえのわけもん
娘	もしめ
後妻	のちぞえ、のちじれ、ごけ
本家	ほんけ
分家	えもちえ(家持ち家?)、えもっちえ
親類	えっけ、かかったえ(家)
血統	ついで、ついでふき(引き)
赤ん坊	あかご
子ども	
男の子	おとごんこ、ばーじんこ、ばーじご(坊主っ子)
女の子	にょうばんこ、おなごんこ、しびたれ
青年	わけし(若い衆)、わけもん
大人	おせ
僧侶	お寺さん、ぼつあん、ほうじょさん(禅宗)、ごえんげさん(真宗)、ほうえんさん(真言宗)
お寺の奥さん	
警察官	じんささん、じんさ(巡査)、じんさはん、だんさん
馬鹿者	だらくそ、あんぼんたれ、だらじ、だら
怠け者	なまけもん、おおちゃくもん、じくだれもん
臆病者	きもわる、きもほそ、おじけもん
意気地なし	よろくそ

標準語	方言
朝寝坊	ねたら
寒がり	さびが一、さみが一、さぶが一
うそつき	おそたれ、おそつき、ちよっぱいもん
おしゃべり	おしゃべ、かばちたれ、かばちたき
お世辞言い	くちまえが上手、じょーじか(上手家)
おてんば	てんばご(転婆)
けちん坊	よくたれ、よくしっぱ、よくば一、こし、こしし(衆)、こまし、
金持ち	おやかた、おやかたし、おやかたはん
道楽者	たまたれ、どさくれもん
すけべえ	ごくじき(極好き)
酔っ払い	よいたんぼ、よーたんぼ、よいだくれ
働き者	がんじよな、せわやき、こまめな
根性悪	しねくらし、しょうたがわり一、しょうわり
温厚な人	おだえかなし(穏やかなし(し~人、衆))、おらおらとしたし、おんぼらとしたし
丁寧に仕事をする人	ぎじよな仕事、てしゃなし、ねいしゃ、ねん(念)のえったし
きれいな好き	きれじくしゃ
過度のきれいな好き	へんたれ、へんたら
賢い人	かしけし、りこなし、えらいし
気前のいい人	おおばん、かいしょもん、はぶ一(羽振り)がえ一
のんき者	あんきなし
大雑把な人	ざまくなし、ざまくしゃ、なたざいく
短気者	たんかもん、おこりぼっか
熱中する人	のぼせもん、かかーしょ
世間知らず	えのんとんぎゃー、しょけんがわからん
あまり外に出ない人	でぶしょなし
暗い性格の人	しんきくせもん
でしゃばり	でべそ、はこきめ
お調子者	ひょーげまつい、ちよっぱいしけ
大げさに言う人	おーべんけ(大弁慶?)、おーぶろしき、ほらふき
見栄っ張り	だてこき
不平ばかり言う人	くじくり(ぐずぐず言う?)
遊び人	でかけまつい、どうらくもん、どさくれもん

植物

標準語	方言
さつまいも	りーきいも(琉球芋)
じゃがいも	こうぼえも(弘法芋?)
さといも	じーきえも(ずいき芋)
やまいも(自然薯)	やまえも
かぼちゃ	
ナス	なしび
ソラマメ	なついまめ、へーまめ
米(もち米でないもの)	ただごめ

標準語	方言
もち米	もちごめ
いたどり	しんざい
すみれ	しみれ
おおぼこ	すもーとりぐさ (相撲取り草)、おんばこ
ぐみ	ごび
竜のひげ	
いちじく	えちじく
どんぐり	
まつぼっくり	まついかさ (まちかさ~松傘?)
松葉	まついば
枯れた松葉	こなで、こで
樺の実	きのみ
桑の実	くわのみ
つくし	ついくし
とうもろこし	なんばぎん、たーたこ
ねぎ	
きのこ	たけ
彼岸花	ふがんばんな、きついねばな、いかーばな
ホウセンカ	
ははこぐさ	
すいば	しんざい
どくだみ	どくだめ
幹の梢 (こずえ)	きのてんこ
蕾 (つぼみ)	ついぼみ
果実	なーそ
大根	だいこ、だえこ
くず米	べーせんきした (米選機下)、べーせんした、しーらまい、しーらごめ、こごめ
生熟れ	なまおれ
秋グミ	
甘柿	あじがき
干し柿	ついいし柿、ついいんぼし、あまんぼし
渋抜き柿	あわせがき、さわしがき、さらしがき
渋を抜くこと	さらし、さわし
菜の花	
実の入っていない米	しいらまい (しいら米)
高菜	たかな
サトイモの親芋	えもがしら (いも頭?)、かみ
サトイモの小芋	じーきえも
ねむの木	かーかの木
サルトリイバラ	かたら
切り株	きーかぶた
キャベツ	かんらん
草刈	くさかー
木苺	

標準語	方言
なめたけ	のめたけ
薪	わーき(割り木)
竜のひげの実	
果物の芯	さね、たね
木のささくれ	しばー、しばり
野菜の芯	しんた
すもも	とーぼーさく
もみがら	しくも
野菜	なっば
大根づけ	だいこつけ
柿をとる竹	たけんばー(竹棒?)、わーばさん(割鋏?)、はさんばー(鋏棒?)
うるち米	ただごめ
果肉が落ちる	ぼろけー、おちー、みがおちー
インゲン豆	
ねこやなぎ	
唐辛子	とんがらし、からなんば(唐なんば?、辛なんば?)
根	
竹の根	
野菜を切る	なっばをはやす
つくし	つくしんぼ
むかご	みかご
れんげ	みやこ
ゴーヤ	

動物

標準語	方言
オス牛	おんた、こって、おおごって
メス牛	めんた
子牛	べべんこ、べんた
かえる	ぎゃーこ
ひきかえる	ふきんぎゃー、ふくんぎゃー
その他のカエル	ぎゃー
もぐら	もくろ
モグラの通った道	もくろあな
赤とんぼ	
ふくろう	よじく
ふくろうの鳴き声	「てれつけほーせ」、「のりつけほーせ」、「そろっとこーか」～そーっと来ようか
つばめ	ひーご
せきれい	しょにん
めだか	ねんば、ねんばご
へび	くちなわ(口縄?) (朽縄?)
まむし	まもし

標準語	方言
その他の蛇	なぶさ、さかお、からしぐちなわ、ひばかり (15~20センチ位の猛毒蛇)、ふばかり (「ひばかり」と同じ)
とかげ	ちょうけん
かたつむり	でんでんもし
蝶	ちょんちょ
とんぼ	
かいこ	かいこさん
いなご	えなんご
かまきり	かまかけ
ありじごく	こもこもさん、けっきょさん、じょじょさん
あり	あーご、ありんご
あめんぼう	
みずすまし	じゃんじゃんまいこ
カップ	かわこ (川子?) (河童)
おたまじゃくし	
アオダイショウ	
蛇のぬけがら	へびのそげ、くちなわのそげ
くもの糸	くものえと
紙魚	
かめむし	はっとさん、おじょろさん、はっとじ
川にいる魚の名前	はえんご、ぼっか
湖の魚の名前	ないし、ふな、ごじ
赤魚	あかさかな
イトミミズ	えとめめじ
青魚	あおざかな
海の魚の名前	
とびうお	あご (「あご野焼き」~トビウオを原料とした「ちくわ状」のかまぼこ。)
秋口に出る飢えた蚊	あばれが
あぶらむし	あまご
蟻	あーご
魚釣りの餌	めめじ (ミミズの意)
鮫魚	
えび	えびんちょ
子鼠	こねら
大鼠	おおねら
ごく小さいエビ	おだえび
うじ虫	おじ、おじもし
エイ	
ひぐらし	かなかな、(かなかな田は植えるな~田植え時期が遅くなると良くない。)
かなぶん	こがねもし
カマドウマ	
かまきり	かまかけ
おはぐろとんぼ	かわとんぼ

標準語	方言
川蟹	
青虫	
キリギリス	ちょんぎーし、ぎーし、(ぎーし籠なやな (の様な) とこ (所=家) ~キリギリスの籠の様な貧相な家)
紙魚	
小魚	ざっこ
トカゲ	ちょろけん
ヤモリ	やもー
つばめ	ついばめ
川の毛がに	つぼがに
山鳩	
ねずみ	ねじん
めだか	ねんぱ
蠅	はえほんぼ
毛虫	はげむし、はげもし
サンショウウオ	はんざけ、はんざき
ヒル	ひーりん、へーりん、ひーる
みずすまし	
カワニナ	にな
オニヤンマの雌	おんじょ
鮫	わに

身体語

標準語	方言
つむじ	ぎり、ぎりぎり、ぜんぜんまいこ
頭	あたま
眉毛	まいげ、まえげ
まつげ	まついげ
顔	かお
唇	くちぶう、くちぶー
舌	べろ
よだれ	ごぼじ
つば	ついばき
咳をする	せきしー
ほほ	ほーべた、ほおべた
ひたい	ふたいぐち
あご	おとんげ、あごた
中指	たかたかえび (指～えび)
薬指	くすーえび (指～えび)
小指	こえび (指～えび)
親指	おやえび (指～えび)
人差し指	ふとさしえび (指～えび)
ひざ	ひざっこばーじ、しねっこ
ふくらはぎ	こぶら、こふら
かかと	しろっこ

標準語	方言
尻	しーご、しーごだま、しーべた
肥っている人	こえたし(し〜衆?、人?)、こえちよーし、ぼて
痩せている人	やせご、やせ、はせし、からからとしたし、しんごらとしたし、しわしわとしたし
背の高い人	おーきゃんし、せたかのっぼ、のっぼさん
背の低い人	ちび、ちびさん、たきのねし(丈の低い人)、こじょっころとしたし
はげ頭	きんか
髪が伸び放題の様子	えじくらしやな、さだくろー(貞九郎~歌舞伎役者の髪型)、おっさばかいたやな
ほくろ	
あざ	
腫れ物	もの、できもん

天地

標準語	方言
太陽	てんとさん
月	おついきさん
三日月	めかじき
虹	ねじ
入道雲	にーどーぐも
雷	かんなー、かんなーさん
雷が落ちる	雷がある(あまる~余る?余分、多すぎて落ちる意か?)
梅雨	ついい
氷	ちべてもん
つらら	しんざい、さい、さいぼう
しもばしら	
みぞれ	だべさ
つむじかぜ	
一昨日の前の日	さきのおとついい、せんど(前日以前の日すべて)、あとかた(「せんど」と同じ)
一昨日	おとついい
昨日	きによ、きによう、きんによ
明日	
明後日	
しあさって	しゃーさって
しあさっての次の日	このついきごろ(特定しない次の日)
朝	あさま
夕方	ばんげ(晩の気配か?)、あかくら(明暗)
夜	ばん、よーさ
一日中	いっついんち
夜通し	よっぴって、よびて、よあかし、ふとばんじー
山頂	てっぺん、てんこ
峠	たわ
谷	たにんご

標準語	方言
洞穴	まぶ(間歩)、あなぐら
湿地	しけじ
平坦なところ	ふらち、はらて
川の淵	ふけとこ
地震	じしん
日陰の土地	おんじ、しけじ
湿田	さわだ
大きな田	おおくぼ
東風	こちかぜ
西風	なだかぜ
北風	きたかぜ
南風	はいかぜ、おなんかぜ
北東風	
南西風	はいにし
南東風	
北西風	
田んぼの畦	あぜみち
山崩れ	ぼろけー、ねけとー
石垣	えしがき
川岸	かわんはた、かわげし、かわげた

衣

標準語	方言
着物	きーもん
晴れ着	えーきーもん
普段着	かつまぎ
仕事着	のらぎ
寝間着	ねまき
筒袖	てっぼそで
袖なし	そでなし
ももひき	ばっち、ももふき
ふんどし	えっちふんどし、6尺ふんどし、まわし
裁縫	ぬいもん
洗濯	あらいもん
足袋	
竹の皮を張った笠	たかーばつい
蓑	ねの、めの
ぼろ	ぼろつぎ
ふところ	ふとこー
着物(幼児語)	べべ
綿入れねんねこ	かいまき
袖なし	そでなし
ズボン	じぼん
シュミーズ	しみーじ、しみじ
越中ふんどし	えっちふんどし

標準語	方言
おしめ	もついき
野良着	しごとき
毛布	けっと
背負いの帯	おいこ、おび
てぬぐい	てのごい、てのご
手袋	てぼくろ
財布	
履物	はきもん
下駄	
草履	
ほころび	やぶれ、ふくらべ
ほころびへの当て布	かましついき (喰わす布? ~裏当て布?)、ついきあて (継ぎ当て?)
縫い針	にいーばー
尻当て	しーあて

食

標準語	方言
ご飯	めし
おかず	おかじ
五目飯	まぜめし、しょけめし
おかゆ	おかいさん、おかえ
おじや	えれめし、いれめし
味噌汁	みそしー
さしみ	ついくーみ、ついくり
菓子	
飴	あめだま
鮮魚	びえん、ぶえん
魚(幼児語)	たいたい
魚の骨(幼児語)	
とうふ	とうふ
おから	きらじ
渋を抜いた柿	あわせがき、さわしがき
料理する	だいどこしごと、だいどこをしー
魚をさばく	さかなをしごしー
煮る	たく
蒸す	おもす
焼く	
水蒸気	いげ(湯気)、えげ
こげる	くぎれー、こぎれー、そこついき
ダシ用の煮干	えりこ、えいこ
醤油	しょーい
醤油のかび	さざ
蒸し器	こしき、じーごしき
鉄瓶	てつびん

標準語	方言
やかん	やくわん
急須	きびしょ
すりごぎ	めぐり、めぐー
鍋つかみ	なべつかん
鍋を置く敷物	なべしき
重箱	じーばこ
携帯用の重箱	さげじー、きーだめ
弁当箱	べんとばこ
しゃもじ	めしじゃくし
おたま	しーじゃくし
湯飲み茶碗	いのみ、ちゃじゃわん
飯茶碗	ならちゃ、ならちゃわん
混ぜ飯	しょーけめし
おかゆ	おかいさん
にぎりめし	にぎーめし
餅	
餅(幼児語)	あんもさん
餅の種類	とーつつけもち、ふらもち、ぼたもち、ふきもち、あんもち、きなこもち
雑炊	えれめし、いれめし
おかず	おかじ
さしみ	ついくーみ
煮しめ	
朝飯	
昼飯	ひーめし、つーはん
夕食	ばんめし、いーはん、よーはん
間食	はしま(箸と箸の中間の意?)、こぼしま(箸間の前)
田植終了後の宴	しろみて(代みて~終了の意)、しろんて、どろおとし
ご馳走	ごっつおー
大酒のみ	のんだくれ、のみしけ
大食い	うわばみ
晩酌	
腐る	くさー、せった、えたんだ
食あたりする	あたー
おいしい	まい、めえ
甘い	あめ
辛い	かれ、しょーはい(塩分過多)
苦い	にげ、ねげ
香ばしい	こうばし
焦げ臭い	ごげくせー、こがーくせ
まずい	まんね、まんない
塩気が足りない	そけがねー、まがにけたやな
食う	くー
食う(幼児語)	あーん
飲む	のん

標準語	方言
飲む(幼児語)	のん
酒宴	さかせき、えんかい
腹が一杯になる	はらがふとんなー(腹が太くなる)、はらがちぎれーやな、へそがあかんべしーやな
好き嫌いをする	おきしき
空腹	はらがなえー(腹が萎える)、はらがほせ(細る)

住

標準語	方言
いろいろ	えろー
主人の座る座名	かしら
主婦の座る座名	かかざ、しも
客の座る座名	おかしら、きゃくざ
台所	だいどこ、ながし
流し	ながし
かまど	くど
井戸	えど
便所	せんち、おんこし、しょんべし、かわや、ちょうじ
庭	ねわ
土間	おしのわ、おしねわ、おしにわ
上がり口	あがーはな、ふんだん
客間	おもて
牛馬の小屋	おしごや、まや
薪	わーき(割り木)
たきつけ	たきついき
枯れた松葉	こなで
ゴミ	
瀬戸物	からちもん(唐津物～陶磁器類の総称?)
椀	
箸	
しゃもじ	
米びつ	はんぼ
すりばち	かがち、しーばつい
すりこぎ	めぐり、めぐー
まないた	まなえた
包丁	ほうちよ
小刀	
徳利	かんどく、ちょうし
長火鉢	ながふばつい
五徳	
十能	じーの
七輪	しついろん
釜	はがま
ざる	かご、そーき
たわし	

標準語	方言
水がめ	はんど
おけ	たが
踏み台	あしつぎ、ふんだん
はたき	ついらい
ほうき	ほうき
こまざらい	
つち	どろ
のこぎり	のこ、のこぎ一
たらい	たらい、はんぎ一
天秤棒	天秤棒

人事

標準語	方言
産婆さん	さんばさん
おしめ	もつき、もちき
凧(タコ)	
お手玉	おじゃみ
竹馬	たけんま
ままごと	ままごと
片足とび	けんけん、しけんご
じゃんけん	やっき、じゃんけん
おにごっこ	ほいさげやっこ、ほっさげこ、つかまえ一こ
かくれんぼ	かくれごっこ、かくれやこ、かくれおに
走り競争	はし一やこ、とんこ、かけ一やこ
釘打ち	くぎたて
めんこ	べった一、べったり
馬乗り	どだい、おまのり
肩車	てんぐるま、てんぐ一ま
その他の遊び	
人形	にんぎょさん
おはじき	おじゃみ
いいなづけ	えし、え一し
見合い	見合い
仲人	こ一じにん
結納	い一の
婚礼	し一げん(祝言)
花嫁	よめごさん、よめさん
里帰り	里えき(里行き)
嫁が実家に帰る	さといき(里行き)、えでほり(井手掘り?~婚家と気まずく なって実家へ一時帰る)。
寡婦	
病気	えたしんな一
怪我	あいまち(過ち)
葬式	あぶらあげ、そ一れん

標準語	方言
一周忌	ほーじ（法事～3年、7年、13年、17年、25年、33年、50年等の法要を言う）
祭り	まつり、まついー
お賽銭	さいせん
命日	あたーび、しにび
三周忌	さんねんのほうじ
最終の法事	
仏様	ほとけさん、ぶつだんさん
仏様（幼児語）	のんのさん
葬儀の饗応	しあげ、しゃーげ（仕上げ）
新築	ふしん、たてまえ、しほんばしら
棟上	みねあげ
新築の祝賀	けんじいい（建瑞）
見舞い	のぞく（祝く～様子伺いに行く）

感覚・感情

標準語	方言
寒い	さぶい、さびー
暖かい	のくい、ぬくい
暑い	あついい
蒸し暑い	おもしろい
涼しい	しじしー
可愛い	かわいげ、かわいげな
やかましい	やかまし
好感が持てない	しかんげな（好き風でない）、しかんやな
痛い	えたい、えて
かゆい	かいい、かい
くすぐったい	こちょばい、こそばし、こちょばしー
頭が痛い	あたまがえて、じちーがしー（頭痛がする）
歯が痛い	はがえて、はがはしー、はがおじく
腹が痛い	はらがえて、はらがえたい
腫れ物が痛い	おばー、おばる
歯がうずく	はがおばー、はがおじく
しんどい	えらい、せついい、えたしー
疲れる	くたびれー、くたべー
高熱の悪寒	さみけがしー、さびけがしー、そんぞがついく
嬉しい	おれしー
悲しい	えとしなげ、えたわし
楽しい	おもしろ、おもっせ
腹が立つ	きしゃがわりー
気分が悪い	みなんとがわりー
冷たい	ちべて、ついべて
ぬるい	のり、のりー、おぼろ
待ち遠しい	てまえれ、てまがえー
鳥肌が立つ	そんぞがしー、そんぞがついく

標準語	方言
面白い	おもしろ、おもっせ
うらやましい	しょのましー
恐ろしい	おぜー、おぞい
飽きる	あきー

状態・動作

標準語	方言
(雷が)落ちる	雷があまる
(軽く)ぶつかる	こさげる
(鼻を)かむ	(鼻を)しむ
鼻紙	はなしんがん
(屁を)する	(屁を)こく
(水を入れて)うめる	おめる、おべる
(野菜を)切る	菜をはやす
(湯や水を)捨てる	してー、してる
愛想がつきる	あきー、やーげがしー
青あざが出来る	あざができー
仰向けにひっくり返る	かえさめになる
あきらめる	おんじょをおさめー
あぐらを組む	ふざをくむ、あぐらをかく
開け放つ	あけっばらー、あけっばなし、あけばなし
足を運ぶ	えく、まかいでる
頭がおかしくなる	だらじになる、ほうける
穴をあける	あなをあけー
暴れる	あばれー
あふれ出る	あえてる
あわてる	おろたえー、ついついぎれー
胃が痛くなる	いがえたんなー
生かしておく	えかえちよく、えかいちよく
生き返る	いきもどる、えきもどー
いじめる	しご、せごしー、やついける
いじる	かまう
忙しくする	せわしげ、けわし
糸を引く	えとをふく
いらいらする	えらくらしー
動かす	えごかす
うずくまる	おじくまる、ついでなー
うたた寝する	おたたねをしー
うつ伏せになる	おちぶせんなー
唸る	おなる、おじよー
膿を出す	あやかす
偉そうにする	たいそげにする、えばる、えらげにしー
追いかける	ぼっさげる、ぼいちゃげる
追い出す	ぼいだす

標準語	方言
往復する	いきたーきたー、えきたーきたー、えったーきたー
大声で叫ぶ	がいなこえをしー
大声で叱る	どなる
大騒ぎする	おーはいごん
遅らせる	おくれー、おくらせー
怒る	おこー
おごる	はまる
教える	いいてきかせる、えってかせー
おじけづく	おぞけがしー
押し込む	ついっこむ
押し込める	おしこめー
お世辞を言う	じょうじをいう
おだてる	もちゃげー、おだてー
落ちる	ぼろける、したる
大人びている	おせげな、おせらいちよー
おべんちゃらを言う	じょうじをついかう
恩着せがましくする	おんがましにしー
帰りたくなる	えのーたんなー
帰る	えのー、えのる
かがむ	ついぐなー、しゃがむ
陰干しにする	かげぼしねしー
傘に入れる	かさねひゃーらせー
火事になる	くわじんなー
風邪を引く	かぜをふく
数える	かじえー、かじれー
片意地を張る	きこをはる、きこはり
かつぐ	えなー
化膿する	おむ、おんだ
からかう	かまう
かんしゃくを起こす	やけくそをおこす
頑張る	ぎばむ
気が遠くなる	きがとおんなー
気が向く	きがみく
気取る	きどー
気張る	きばー
逆上する	のぼせる
興ざめする	
腐る	えたむ、くさー、せる、せった
苦情を言う	こごとをいう
くすぐる	こそばかす
くすぶる	しもる、しもー
くずれる	くじれー
口答えをする	くついごたえをしー
くれる	ごす、あげる
化粧する	めかしこん

標準語	方言
結婚する	えっしょねな一
煙る	しもる、しも一
言を左右する	いいわけ、あげいゃーこげい一、あげこげ
ごそごそする	ここーそどがね
ご馳走になる	よばれ一、ごっつおにな一
ご飯を茶碗に入れる	めしをちゃわんねもる
ごまかす	まんちゃら、ちょろまかし、どまかす
転ぶ	まくれる
怖がらせる	おぞがらせ一、おそらかす
探す	たじね一、とめ一、さんご一する
刺さる	ささ一、しば一がたつい
冷ます	さませ一、さます
さわぐ	はえごん、はいごん
静かになる	おとなしんな一、おだやかんな一
支柱をとりつける	しけをか一
失神する	き一しな一（気を失う）
知ったかぶりをする	しったふ一をし一、しっと一やなふ一をし一
失望する	がっか一する
死ぬ	しの一
縛る	しば一
渋を抜く	あわせ一
しゃがむ	しわ一こむ（座り込む）、ついぐな一
じゃれる	つばえ一
出産する	めやしんな一
正気がなくなる	
炊事や給仕をする	だいどこをし一
すすぐ	えしぐ
すっかりご馳走になる	お一ちょうだい、お一よばれ、えっとよばれ一
捨てる	して一、してる
すねる	ふて一、ふてる
滑って転ぶ	しべってまくれ一
擦り切れる	し一はげ一
すりつける	こし一ついけ一、ねしく一ついけ一
座る	ねまる、ねま一
正座する	かしこま一、ええちゃんこ
咳が出る	せきがで一、せきをついく
責任を負わせる	せきにんをねすくる
平らにする	ならす
高く売る	たかねお一
叩く	しわぐ
ただれる	ただれ一
駄々をこねる	やんちゃをこね一
立つ	たて一
立て掛ける	たてかけ一

標準語	方言
立てひざをする	たてふざをしー
田のあぜがこわれる	たのあぜがめげる
束ねる	そくー
騙す	どまかす
だらしなくする	らしなし
小さく切る	こまねきー
小さく砕く	こまねこじく
調子に乗る	のーばーじ
散らかす	ついらかす
沈殿する	とどる
使い果たす	なーなー、なんなー
つかまる	さばる
告げ口する	ついげぐついをしー
つねる	ついめくー
手足をまっすぐ伸ばす	のべる
停電する	でんきがきえる
手向かう	むかついてくー
問い詰める	やーこめー
倒立する	さかてんごになる
どなる	どなー
鳥獣を殺す	ころす
戸を閉める	とをたてー
仲間にする	どしねしー
無くなる	なんなる、しかんぼになる
殴る	たたく、しえあぐ、なぐー
なすすべがない	どげしょやもね
なぞる	などる、などー
納得する	なっとくしー
怠ける	なまけー
難儀する	えらいめをしー
臭いをかぐ	ねおいをかぐ、かじん
荷造りする	にじくりをしー
二の足を踏む	ねのあしをふむ
入浴する	ふろにはえー (風呂に入る)、ふろねふゃー、ふろねひゃー
盗む	とる、のしむ、のしん
寝る	ねー、やすむ、やしん
寝る (尊敬語)	やしまれー、やしまっしゃー、やしんなはー
念入りに吟味する	さんごーする
のぼせてしまう	のぼせこんでしまー、のぼせあがー
墓に入る	はかねふやー、もてえしをかぶー (重い石をかぶる)
吐く	あげー
激しく怒る	がいねおこー
運ぶ	もそぶ
走り回る	かけじーまわー、かけまわー

標準語	方言
走る	かける
話の調子を合わせる	
腹が減る	はらがなえー、はらがほそんない
腫れる	はれー
干からびる	ふからびー
引き受ける	おけあー (請合う)
ひっかく	かぐー
ひっくり返す	かえくらかす、ふっくーかえす
びっくりする	おべる、おべー
ひどく転ぶ	はねまくれー、がいねまくれー、ごーぎねまくれー
病気でうなる	えたしておなっちょー
病気になる	わじらー (患う)、えたしんなー
ふざける	つばえる
ぶつかる	ぼついーかー
ふてくされる	ふくれー
太る	こえー
踏み荒らす	ふんたたく、ふんついらかす
弁償する	かぶる、まどう
呆ける	ほーけー、ぼけー
帽子をかぶる	ほーしをかぶー、シャッポをかぶー
放っておく	なげちよく
訪問する	えく、まかいでる
ぼんやりする	ほーけちょー
招く	よぶ
水に浸す	めじねついけー、めじんついけー
水に潜る	めじねもぐー
みせびらかす	めせびらかす
耳を澄ます	聞き耳をたてー
剥く	はぐ
むずかる	やごをいう
胸焼けがする	みなんとがやけー
もがく	あじー、あじくそをたれー
もそもぞする	ごそごそしー
戻る	えのー、えのる、もどー
もみほぐす	
門前払いされる	かどばらい
やきもちを焼く	
焼く	
役に立つ	やくんたつ
ゆがむ	えがむ
行き届かぬ	ことんならん
ゆっくりと落ち着く	おちらと
茹でる	えでる
揺り動かす	ふてぶー
結わえる	えわいついける

標準語	方言
横になる	よこんなー
夜中に目がさめる	よなかねめがさめー
別れを告げる	さいならしー

様子

標準語	方言
少し	ちょんぼし
たくさん	ろーちき、えっと、がいね、ばくたい
急に	あただに、じきに
ゆっくり	おちらと
だいたい	たいげ、おーかた、おーね
あいにく	えんばと
案外に	
案の定	あんち、やっぱし
いくらなんでも	なんぼなんでも
いくらも	なんぼも
以前から	じっとまえから、ちっとまえから
常に・いつも	えついも
最も・一番	じんど、ちっと
いつか	えんまね
一向に	ぶでに、ぶでーに、ぼでに
一生懸命に	がっしょで、がっしょがけて
いつでも	えついつでも、えついえき
いつもいつも	たんびたんび(度々)、えついもえついも、ただもん、まえじ(毎時)
今一步のところ	もーちょんぼしで、もーちょっこして
今ごろ	えまごろ、えまんごー
うっかりして	おっかーして
有頂天	のぼせて、のぼせあがー
運良く	ええあんばいね
運悪く	おんわりね
遠慮なく	えんりよなし、じぎなしね
大げさに	たいそげに、おーべんけね
おおよそ	たいげ、だいたい
惜しげもなく	おしげなし、おしもなさげね
恐る恐る	おそーおそー
思い切り	おもいきー
思ったとおり	おもったやに
がむしゃらに	がっしょで
かろうじて	ほのって、やーやのことで
気軽に	きやしに
きちんと	しゃんと
几帳面に	ぎじょね
気楽に	きやしに
具合よく	ぐあいしけよく

標準語	方言
強引に	やめくた、やめくたさんほ
交互に	かわ一ばんこ、あとさき
こっそりと	そろっと
根こそぎ	ごめた、ごっと
このまま	このまんま
こんな	こげな
あんな	あげな
そんな	そげな
どんな	どげな
最初に	ことのはじめ、だいじょ
さっさと	あっさーと
しきりに	しきーに
じっと	じっと
しばしば	たんびたんび
しぶしぶ	しかたなし
十分に	ばくたい
しょんぼりと	しょんごろと
知らない間に	しらんまね
じわじわと	じねんに、じねんね
すぐに	じきに、じきね
すごい	たいした
少しも	ちーとも、ちとだい、かいしき
すっかり	てんで
すんでのことで	えんぼとした、えっぼどで(よっぼどで)
贅沢な	ごーぎな、たいそな
是非とも	どっちめっち、どげぞ、どげでも、どーでも
全部	ごっと
そっと	そろっと
そろそろと	ぼちぼち
きちんと	ちゃんと
たやすく	めやしく、めやしね
だらだらと	じじらね、しまーがね
ちょっとやそっと	ちーとやそっとで
次々に	じじらね
続けざまに	たてついじけね
適当に・いいかげんに	めげばこきめ
できることなら	たいげなら、できーことなら
どうか	どげぞ
どうにでも	どげねでも、どげなと
どうにもこうにも	どげだえこげだえ
どちらでも	どっちでも
どっかりと	どっかー
突然に	あただに
どっちにせよ	どっちめっち、どちめち

標準語	方言
とんでもない	えなげ(意外な?)
なにかしら	なんだえ、なんだえら
なにしろ	なんてて
なんやかや	なんだえかだえ
なんでもかんでも	なんもかんも
なんとかして	どげぞして
なんとまあ	なんとまー
なんなりと	なんでも、なんな一と
似たり寄ったり	にたーよったー
のんびり	おちらと
馬鹿げた	だらついつた
馬鹿らしい	だらついつけな
始めから	だいじょから
派手な	
久しく	ふさしぶー
ひょっこりと	えんぼと
貧相な	ひんそな
敏捷な	はしけな
無愛想な	あいそなし
不快な	きしゃがわり、きしゃくそがわりー
不器用な	ぶさいくな
くだらない	ついまらんげな
無作法な	ざまくな
ぶざまな	ぶさいくな
不十分な	ついーとはんば、どちはんじゃく(中途半端~どちらへも半尺 足らず?)
平気で	おてんべ
偏屈な	へんくそ
変な	えなげな
ほんのわずか	ほんのちよんぼし
本当に	ほんね
まったく	てんで
決して	かなに、かなね
まもなく	じきに、じきね
無責任な	なげやーな
むやみに	やめくた
無理やり	やりんもり
もう少しで	もーちよんぼしで、もーちよんぼで
もっと	もっと
もともと	だいたい
もうすぐ	もーじき
やたらに	やめくちゃね、やめくたね
やっとのことで	ほのって
やっぱり	やっぱー
容易に	まげに、みやしげね

標準語	方言
陽気に	おらおら
よくよく	よーね
よそよそしい	しょしらと（他人げな風）

幼児語

標準語	方言
神仏	のんのさん
神仏をおがむ詞	あっあ
太陽	おひさん、おてんとさん
月	おつきさん
星	ほし
雨	ぶちゃ
雪	
傘	
濡れる	ぬれー
水たまり	めじたまー
雷	かんなーさん
風	
石	えし
砂	しな
化け物	ばけもん
幽霊	ゆうーれい、いーれい
恐ろしい	おじえ、おじえー
牛	おし
馬	おま
豚	ぶた
犬	えの
猫	ねこ
ねずみ	こねら（小ねずみ）、おおねら（大ねずみ）
にわとり	こっこ
すずめ	ちょんちょ
魚	たいたい
金魚	
かえる	かえる、ぎゃーこ
虫	もし
毛虫	けもし
セミ	
蜂	はつい
花	
乳	ちち
おかゆ	おかえさん、おかいさん
ごはん	まんま
餅	あんも、あんもさん、あもさん
めん類	おどん、そば
卵	まーご

標準語	方言
みそ汁	めそしー
湯	い
水	めじ
酒	さけ
菓子	ええもん、えーもん
食べる	くー
飲む	のん
なめる	なめー
噛む	かん
吐き出す	げろをだす
口を開く	あーん
茶碗	
皿	てっそ、さら
包丁	ほーちょ
切る	はやす、きー
焼く	
煮る	にー
腐る	くさー
着物	おべべ
晴れ着	ええべべ
きれい	きれー
綿入れ	わたえれ
ねんねこ	ねんねこ
暖かい	のく、のくい
布団	
おしめ	もちき
帽子	シャッポ、ぼーし
足袋	たび
手袋	てぼくろ
手ぬぐい	てのごい、てのご
靴	くつい
下駄	げた
ぞうり	ぞーり
針	
汚れ物	ち々なち々な
きたない	ち々なち々な
風呂	ぼんぼ、ぶちゃ
電灯	でんと
タバコ	
うちわ	おついわ
時計	とけー
銭	ぜね
頭	
目	
耳	

標準語	方言
頬	ほーべた、ほーげた
舌	
手	
腹	ぼんぼ
足	あしこ
大便	うんち、うんこ、おんこ、あんこさん
小便	しっこ、しょんべ
つば	ついば
くしゃみ	くしゃみ
咳	せき
病気	やまえ、えたし
けが	あいまつい
とげ	しばー、しばり
血	つい
注射	ついーしゃ
薬	くしー、くしり、くそー、くそり
てんかふん	
人形	でこさん
太鼓	たえこ
車	ぶーぶ、くーま
鉛筆	えんぴつい、えんべつい
文字	じ
手拍子	
抱く	かかえー、だく
背負う	おう
肩車	てんぐーま
水遊び	めじあそん
寝る	ねんね
座る	ちゃんこ
正座する	えーちゃんこ
起きる	おきー
這う	はー
立つ	たっち、たった
歩く	どんどん
なでる	かわいかわい、ほんそほんそ
くすぐる	こちょこちょ
つねる	つめくー、つめくる
叩く	ぺんぺん
叱る	めー
捨てる	ばい
投げる	ぼーん
落とす	ぼろかかす、おとす
降りる	おりー
上がる	あがー
隠す	ないない

標準語	方言
しまう	しまー
倒れる	まくれる
泣く	えんえん
怒る	おこー
おじぎする	こんちこんち
あいさつ	

挨拶

標準語	方言
朝のあいさつ	「おはよさんでございましてね」、「おはよございましてね」、「おはよさんでして」
昼のあいさつ	「こんにちは」
夕方のあいさつ	「ばんじましてね」、「ばんじました」
夕方、まだ仕事を している人へのあいさ つ	「まーじくらんなましたがね」、「ばんになーましたけんそろそ ろしまってごしなはいよ」、「そろそろしまいませよやね」、「こ ばやねおしまいなさいませ」
夜のあいさつ	「こんばんは」
暖かくなった日のあ いさつ	「のくんなーましたがね」、「のくんなーやんなーましたね」、 「えーかんころねなーましたがね」
涼しくなった日のあ いさつ	「しじしん（涼しく）なーましたね」、「しじしかぜ（涼し風） がふくやーね（吹くように）なーましたね」
久しぶりの恵の雨の ときのあいさつ	「ひさしぶーねええ（良い）おれ（潤い）がしましたがね」、「ひ さしぶーのえーあめでしたね」
長雨のときのあいさ つ	「まーじ毎日しけしけしましがね」、「まーじよーふーましがね」
暑い日のあいさつ	「まいにちあついことではがね」、「まいにちのくことではがね」、 「のくございませがね」
寒い日のあいさつ	「さみ（寒い）ことではがね」、「わけてもきょーはさび（寒 い）ことではがね」、「さび（寒い）ございませがね」
訪問のあいさつ	「とーし（いつも）ねありがとございましてね」、「こんにちは、 ただも（たびたび）ありがとございましてね」
客を迎えるあいさつ	「おいでなさいましたね」、「まーよーおいでなさいましたね」、 「さ、どーぞあがってごしなはいえ」、「よーごだっしやった」
辞去のあいさつ	「しんませんでしたね」、「えついてもえついてもありがとございま してね」、「ほんならしつうれ（失礼）しましけんね」
先に帰るときのあい さつ	「ほんならちよっこしさき（少し先）ねしつうれさせてもらい ましけんね」、「ひとあしさきねしんません」
見送る人のあいさつ	「またきてごしなはいませね」、「またごだっしやいね」
手土産を渡す人のあ いさつ	「ついまらんもんでしが、,,,,、」、「わじかなもんでしが、,,,,」
土産を貰うときのあ いさつ	「めやげやなんかえもらったてえけませんが、、、、「こりゃ しんませんね、だんだん」
物を借りるときのあ いさつ	「何々を、ちょっしかせてごしなはいえ（貸せて下さい）」、「か せてごしなはいえ」

標準語	方言
借りた物を返すときのあいさつ	「だいじなもんをおせわさんになーましたね」、「えらいおせわさんになってしんませんでした」
店に入るときのあいさつ	「こんにちは」、「ただもだんだん」、「ごめんなはいして」
店を出るときのあいさつ	「またくー（来る）けんね、だんだん」、「だんだんね」
食事を勧めるときのあいさつ	「はししてごしはい（下さい）ませ」、「なんだいいあーませんだともあがーまして（お上がりになって）ごしなはえ（下さい）」、「まーじふかげんなもんだとも（不加減）、たべてごしなはえ」
食べ始めるときのあいさつ	「ほんならじぎなしねよばれましわ」、「ほんならじぎなしねちよーだいしましわ」、「ちよだいしまし」
食べ終わったときのあいさつ	「ごっつおーさんになーました」、「ごっつおーさんでした」、「めじらしもんちよーだいしました」、「えらいごっつおーさんになってしんませんでしたね」
年末のあいさつ	「えとし（良い年）をむかえなさいませやね」、「ことしもまたおしついまーましたね」、「せき（年の瀬）になーましたね、らいねんはえとし（良い年）ねならにゃえけませんがね」
年始のあいさつ	「おめでとうございます、こしもかわーませじ、よろしくおねがいしましけんね」、「ことしもかわーませじよろしくたのんましけんね」
見舞いのあいさつ	「こないだ（先日）は、ちよーしがわりかったげで、かげんはどげねしやらね?」、「そーからのち（あれから後）のぐあいはどげねしやらね?」
お悔やみのあいさつ	「こちらさんには休んでおいでましたね、お取り直しができませだっただげねして、まことにお気の毒なことでございましてね」
結婚を祝うあいさつ	「この度は結婚なさいませけんねして（結婚なさるそうで）、まことにおめでとーございました」、「お嫁さんがみえたげで、もことにおめでとうございます」
嫁を連れて近所を歩くときのあいさつ	「こんど家へ来てもらった嫁さんでしけんね、よろしくおねがいします」

道具

標準語	方言
鍋・釜の種類	
包丁の種類	菜きりぼーちよ、菜はやしぼーちよ、でば、さしみ
まな板	まなえた
台所用品の名前	
茶碗・食器類の名前	てっそ（皿）
煮炊きに使う道具	
餅つきに使う道具	せいろ、こしき、つきおし（搗き臼）、おついえた（打ち板）、もろふた
かまど	くど
鎌の種類	きこーがま（木こり鎌）、くさかーがま（草刈鎌）
鍬の種類	まどくわ、4本こ、しろし、たけんこほー

監 修 藤岡 大拙（出雲弁保存会会長、島根女子短期大学学長）
友定 賢治（広島県立健康福祉大学教授）

編集委員

委員長 目次 実（宍道・出雲弁保存会会長）
副委員長 坂本 研次（ ” 副会長）
福田 明正（ ” 監事）
森脇 喜將（ ” 幹事）
太田 実（ ” ” ）
安井 誠（ ” 事務局長）
稲田 信（ ” 事務局員）
糸川 桂子（ ” ” ）
杉井キミエ（ ” ” ）

*編集にあたり、多くの宍道・出雲弁保存会会員の皆様にご協力をいただきました。紙面を借りて、感謝申し上げます。

公益信託

しまね文化ファンド

表紙画 太田 実（宍道・出雲弁保存会会員）

くらしの中の出雲弁

2003年12月1日 第一刷発行

監 修 藤岡大拙・友定賢治

編 集 宍道・出雲弁保存会

印 刷 柏木印刷株式会社
松江市国屋町452-2

茶

宍道町菟古館

政店